

1 本 釣 漁 場 調 査

久 貝 一 成

沖繩の1本釣漁業は沿近海漁業中カツオ漁業に次ぐ重要な漁業でその漁獲高は1968年度の1750トンを除いては大体1900トン~2000トン台を維持している。しかしこれは漁船隻数の増加による漁獲量増加であって漁獲率からみて伸び悩みの状態にある。この原因は第1に主として漁場が曾根を基礎にした漁業であり、かなり漁場範囲が制約されていること。第2に漁獲努力が増大しているにもかかわらず釣獲率がかなり低下の傾向がみられることにある。このように伸び悩みの現状を打開し、生産の増大を図るためには新漁場の開発、漁具の改良と併せて漁場環境把握による能率的操業が必要である。このような観点から漁場環境、対象資源及びその分布状況、既存漁場に接続する深みの未開発漁場の開発とその利用と併せて新漁場調査のため調査船「図南丸」(159.31トン、400馬力)を使用して第1次は1969年11月26日から12月11日まで与那国島南の通称中のソネ付近を調査し第2次は主として沿岸のフェフキダイ類の調査の目的で1970年6月10日から16日まで石垣島沿岸の調査を実施した。

調査の概要

I 第1次調査

この調査では深海多鈎立繩釣を使用して手動巻揚による投揚繩を行ない魚探で魚群、漁場探査を記録調査し、漁場の海洋観測をしながら魚種組成、釣獲率については餌料別に比較試験を併せて実施した。特に餌料魚については最近価格高騰傾向にあるのでこれが自給可能かどうかについても試験した。

また与那国町からボラの回遊調査の依頼を受けボラの調査も兼ねて実施した。

(1) 魚種組成、体長組成、釣獲率

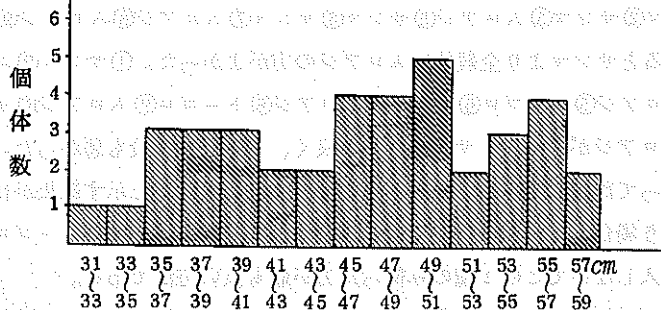
イ、魚種組成

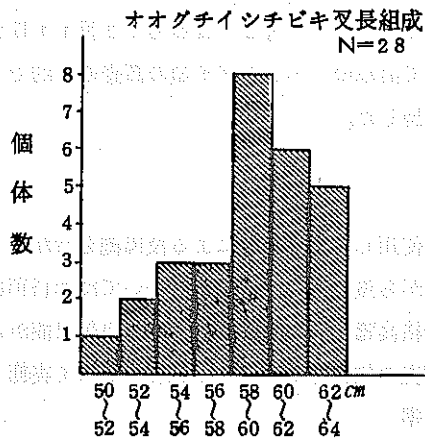
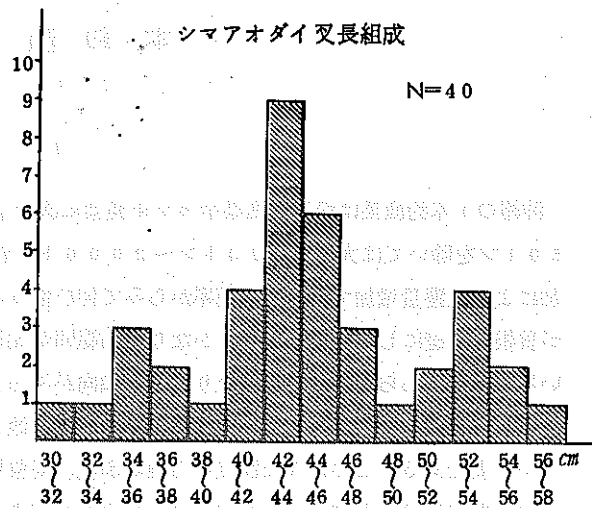
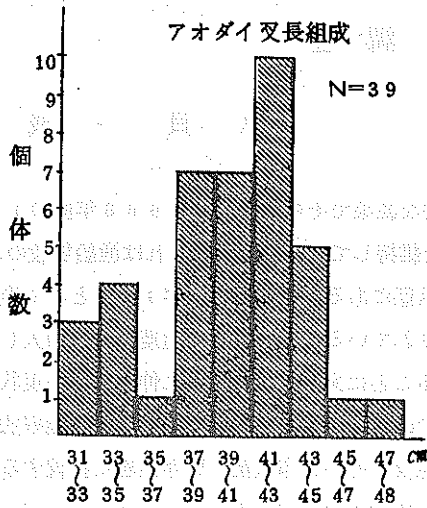
オオヒメ、アオダイ、シマアオダイ、ハマダイ、ハナフェダイ、オオグチイシチビキ、チカメキントキ、ヒメダイ、クサヤモロ、ハチジョウアカムツ、カンバチ

ロ、体長組成

ハマダイの叉長組成

N=40





ハ、釣獲率

最高45.35%最低2.33%平均19.45%、魚種別、混獲率は、オオヒメ8.11%、アオダイ8.95%、シマアオダイ11.05%、ハマダイ47.83%、ハナフエダイ9.51%、オオグチイシチビキ7.27%、チカメギントキ5.03%、ヒメダイ0.84%、クサヤモロ0.14%、ハチジョウアカムツ0.56%、カンパチ0.69%

(2) 餌料別による比較試験

漁具10組を①サンマ②サンマ③ムロアジ④サンマ⑤サンマ⑥サンマ⑦ムロアジ⑧ムロアジ⑨サンマ⑩サンマの順に使ってみるとサンマより一般的にムロアジの方がよかった。①サンマ②ムロアジ③トゴロ④サンマ⑤ムロアジ⑥トゴロ⑦サンマ⑧ムロアジ⑨トゴロ⑩ムロアジ⑪サンマという組合せの場合は、ムロアジが最もよくサンマはやゝ良く、トゴロは最も悪かった。しかしトゴロイワシを全員使って試験してみると釣獲率45.35%と最も高率を示す結果が出た。これからみると混入して使う場合と1種類のみ使用する場合は差がみられ、特にトゴロイワシを使うときは他の餌と混入しないでこの1種類のみ使った方が最も良い方法である。

なおこのトゴロイワシは西表島の船浮港で集魚して得た餌料で餌持ちもよく経済的(自給可

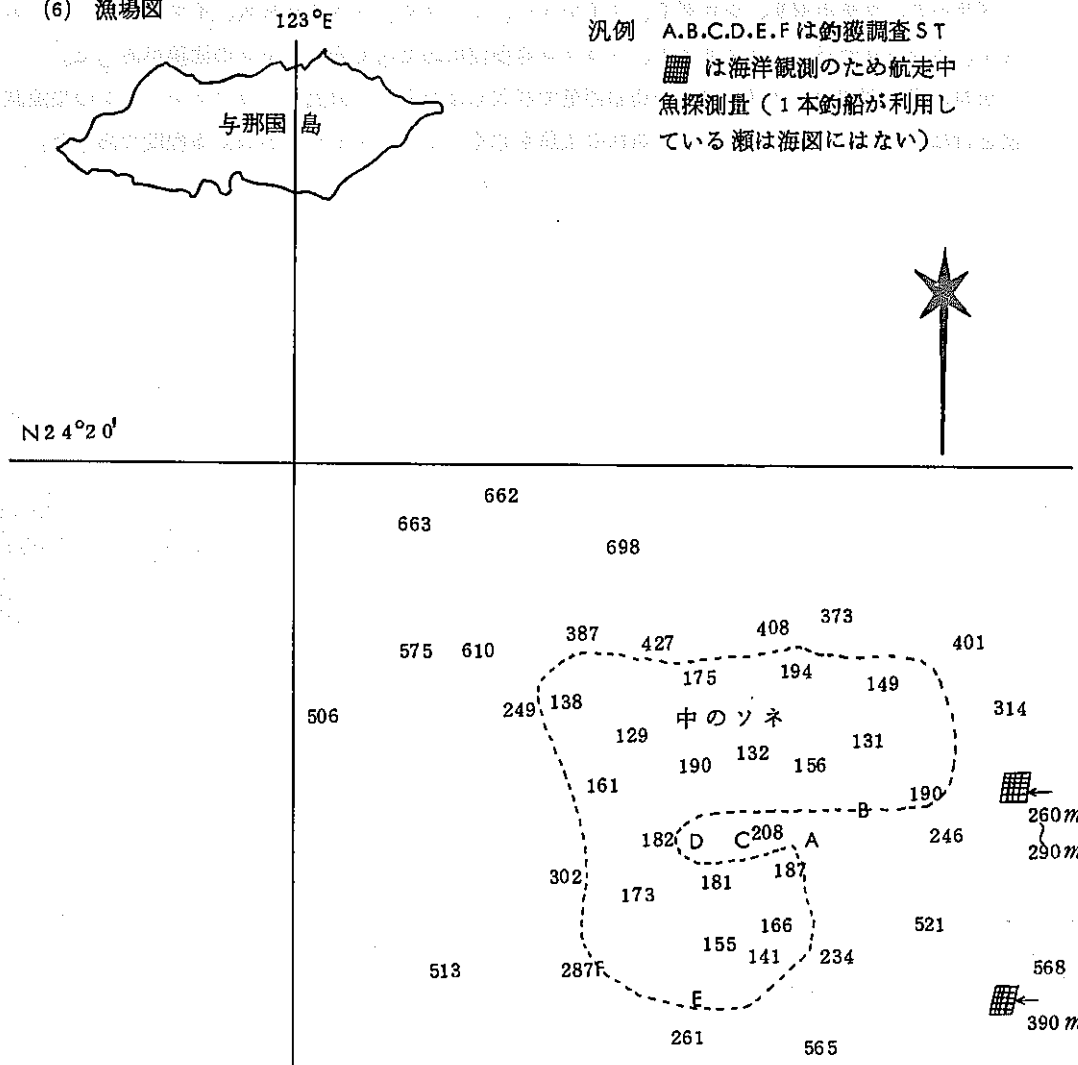
能であるため)である。なお餌料別による混獲率はサンマ18.01%、ムロアジ21.45%、ト
ゴロイワシ17.06%であった。

(3) 餌料魚採捕による自給について
今度の調査では量的にも種類も少なかったが時期によっては自給は可能である。

(4) ボラ資源調査
与那国島の久部良で町役所吏員からのききとり調査の結果は11月中旬から2月にかけてかな
り港内外に来遊するとのことで卵を2尾分(製造用)標本として持ち帰りましたがかなり熟し
ており来遊は産卵のためだろうと考えられるが1日調査したが発見出来なかった。

(5) 漁場での海洋観測
「中のソネ」を中心に観測した結果水温は表面が24.36°C、25m24.3°C、50m24.2
5°C、75m23.96°C、100m23.96°C、150m22.21°C、200m19.7°C、30
0m16.78°Cと極端な水温変化はみられなかった。

(6) 漁場図



II. 第2次調査

この調査では実習生（沖水高5人、宮水高5人）も乗船させ、フエフキダイ類（中でもハマフエフキの生態調査）調査を天秤釣りにより石垣島北部の野底崎沖と平離島沖合の200m等深線内の瀬で実施した。平離島沖合の瀬については地形観測も兼ねて調査したがこの観測はレーダーによる位置測定の誤差が大きかった関係で成果は得られなかった。また7日間の短期の内2日間時化にあい、2日間の調査に終始した。フエフキダイ類調査では両漁場ではハマフエフキの釣獲は確認されなかったが他の魚種の釣獲がよく相当量漁獲された。魚種組成についてみると野底崎北西沖約1.7哩の水深65mの地点ではシマクチビ主体でナガクチビ、ヨスジフエダイ、ヒメダイ、バラハタ、ニセカンランソバギ、クサヤモロ、メイチダイ、シロダイ、アカハナ、ギソガメアジ等約150キロの釣獲があった。平離島廿々東約1.5哩の水深40mのところではユメウメイロの魚群がかなり魚探に記録され、これの釣獲が量的にも多く餌付きは最もよかった。外にヨスジフエダイ、シマクチビ、ナガクチビ、ミナミクチビ、フエフキダイ、アカハナ、バラフエダイ、バラハタ、アカハタ、マダラハタ、ツチホゼリ、シロダイ、メイチダイ、ヒメダイ、トガリエビス、イトトウダイ、フエダイ、ニジョウサバ、ノコギリダイ、タカサゴ等多種にわたって約55キロの漁獲があった。

なお、時化期間中（2日）は西表島船浮港で避難しながら先に放流したカタクチイワシの集魚試験を行なったが全々確認されず他の魚種の集魚も悪く、トーゴロイワシが数える程度であった。

